

ハントケと旧ユーゴスラヴィア

—インターネットによる情報蒐集—

澤 岡 藩

はじめに：インターネットによる情報蒐集

南ドイツ新聞 (Süddeutsche Zeitung) の学芸欄特別寄稿として1996年の1月5, 6, 7日13, 14日の二週にわたってペーター・ハントケの『セルビアを公平に』と題する紀行文が掲載された。この『ドナウ、サヴァ、モラヴァ、ドリナ川への冬の旅』という副題のついた、原稿にして85ページにわたる文章を南ドイツ新聞は「文学的、政治的意義」のあるものとして、その全文を掲載した。

ところがハントケ自身にとっても思いがけないことに、このルポルタージュにたいして各方面から猛反発の声が挙がった。それはハントケの文学上の業績を地に落としかねないほどのものであることが、いくつかの雑誌の記事から見取れた。ハントケの文学的活動の流れからすれば、これは政治的問題というより表現上の、それも言語のリアリティに関わる問題がその中心にあるだろうということはおおよそ想像に難くないと、その詳細を知る以前から筆者には思われたが、とりあえずその経緯の概観をまず把握しようと思ったときに、外国でリアルタイムに新聞等のメディアを手に入れられない環境にあっては、多岐にわたった反響のすべてを活字の媒体で手に入れることは厄介な作業となった。

そのときインターネットがきわめて能率よく情報を提供してくれた。ハントケのテキストもその全文をここでは基本的に南ドイツ新聞によるSZ-ONLINEから得ている。¹⁾ その他各メディアの反応も抜粋の形であってもインターネットを検索することで手に入れられた。たとえそれが抜粋であってもその元の記

事がいつどこに掲載されたものかわかれば、作業の手間は大幅に省ける。ユーゴスラヴィア情勢に関する情報もその背景を必要なだけ知るには十分ある。

ここではハントケのこのルポルタージュを彼の作品の一つとして説明しようということが目的ではない。ハントケ研究の一助としてこの話題になった‘事件’をインターネットという新しいメディアでどのくらい読みとれるものか試してみようと思うだけである。いつ消えるかもしれないネット上のこと故、またプリントアウトされたものはその際の設定に依存しているので、当然引用も頁、行を示して挙げることはできない。ここでは定本といった概念は存在しない。もちろんすべてを活字媒体に引き戻して扱うことはできるが、筆者の環境においてあらゆる雑誌新聞類をたやすく入手できないという物理的な制約もあり、ここではあえてこの新しいメディアが一定の便宜を提供してくれる補助的な手段としてどの程度使えるものか示してみたいと思う。皮肉なことに今度のハントケの批判の対象はメディアの報道の姿勢にある。インターネットも当然のことながら、既製のメディア以上にその批判を免れないことは明らかである。そのことは充分念頭に置いておかなければいけない。

ハントケと旧ユーゴスラヴィア：

ハントケはすでに子供時代からその意識において旧ユーゴスラヴィア、特にスロヴェニアとは密接な関係にあった。1942年オーストリア、ケルンテン州の村グリッフェン生まれということからその関係は必然的なものとなっている。ケルンテンには元々スロヴェニア人が居住しており、第一次大戦後オーストリア帝国が生滅するまでは8世紀以降そこで暮らしてきたドイツ系住民とともに同じ国家に属していた。その後ユーゴスラヴィアによる南ケルンテンの領有権要求などの入りくんだ経緯を経て、最終的に1920年にその帰属を決めるための住民投票が行われることになる。その結果、スロヴェニア系の住民の方が多かったにもかかわらず、当時のオーストリアの政権党であった社会民主党への人気

もあって、オーストリアへの帰属が決まった。それ以後このドイツ系とスロヴェニア系の住民はおおむね良好な関係にあるとはいえ、意識の中での多少の軋轢は避けがたい。

ハントケの場合は、母親がスロヴェニア系、父親及び継父がドイツ系であるが、小説『反復』からも彼のスロヴェニアにたいする思い入れは詳細に読みとることができる。そこでもこの2系統の住民間の微妙な関係が多くの箇所から見取れる。

....そこ（寄宿学校）では何人かのスロヴェニア語を話す者たちは、他の者にとってはなにか面白くなく、猜疑心を起こさせた。以前の学校、ラジオ、教会で聞かれるのとは違って、いつも小声で、ささやきに近く、教室のちょっと離れた角で固まって...²⁾

成長過程にあった彼にとっては、暗い教会の連禱と彼のヒーローである失踪した兄の姿のおかげで、この国の第二言語、少なからぬものにとっては第一言語であるが、それが彼に向けられた敵意のように感じられないですんだ。今世紀も終わり近くになってすら相変わらず、全く悪意などないにも関わらず、ドイツ語を話す多数派にはそう感じられたのだが。³⁾

『反復』の語り手フィリップ・コバルはハントケとほぼ等身大の設定を与えられている。やはりスロヴェニアの血統で、南オーストリア、ケルンテンの小さな村で育った。そこで彼は60年代初頭、まだ20歳のときのスロヴェニアへの旅を現在から振り返る。何年も前から消息の知れない兄を捜しにユーゴスラヴィアへの国境を越えた時のことである。ハントケは不在が人目を引く、不在がその存在を露わにするという言い回しが気に入っているようだが、コバルの家では、絶えずその帰りを待ちわびていることで、兄の不在が特別な意味を帯びている。兄の不在はフィリップが自由に自分の企画や期待で満たすことのできる

空の空間なのだ。落ち着きや強さが必要になるといつも彼は兄の内面的イメージを呼び出す。しかも頻繁に。なぜならコバルの家は、パロディといえるほど何か惨めだから。父はいつも怒り不平を言い、母は病み、姉は精神に変調を来している。もちろんそれはハントケの家庭そのままではない。父親と母親の出自が逆になっている他、例えば兄はハントケの母方の叔父の姿を映しているようだ。いずれにしても言語的にフィリップは母方の（ハントケは父方の）ドイツ語と兄のスロヴェニア語に引き裂かれている

現在パリ在住のハントケは、すでに1991年7月に、独立したスロヴェニアからのユーゴスラヴィア連邦軍の撤退後に、「第9の国からの夢想者の別れ」という題で、独立したスロヴェニアに関する回想と省察を公にしている。スロヴェニアはハントケには、ことばと事物がいわば魔術的に幸福な一体感を享受している土地に見えるらしい。とにかくスロヴェニアが独立した共和国である必然性が彼には全く考えられないと言う。夢想者という表題の一語が図らずも示しているのだが、現実の政治とは別次元のものである。

ハントケのルポルタージュとそれに対する主な反響：その経緯

前年の11月、バルカンに平和協定が結ばれる直前に、ハントケはセルビアを訪れている。その時の、あるいはそれ以前からの基本的印象「過去4年間のほとんどすべてのユーゴスラヴィアに関する報道、イメージは、前線、あるいは境界線の一方からのものである」を主調として、あるいはその印象を確かめるために、このルポルタージュは書かれている。

しかし同時に彼が一方的に親セルヴィアだと思われることに対しては異議を差し挟んではいるが、「ああ、親セルヴィアね」とか「何、大ユーゴ主義者か」とかいう人はこれ以上読む必要はないと挑戦的に言っている。確かにハントケはサラエヴォ周辺の丘の上に陣取るボスニアのセルヴィア人を人類の敵と感じていることは事実だが、

いわゆる世論が、あまりに性急にこの戦争における加害者と被害者の、また純粋な犠牲者と全くの悪人の役割を決めつけてしまった

ことに対する疑念と反感に基づいて、彼はこのルポルタージュの独自のイメージでその世論を覆そうとした。⁴⁾

さて、このルポルタージュに対する反響は、もちろん批判された各ジャーナリズムからまず挙がった。1月27日にはSZ-Onlineが各新聞、雑誌の反響をまとめている。⁵⁾

唯一好意的なのは、Tageszeitung (taz) で、ハントケが戦争責任問題を新たに提議したわけでもなく、セルヴィアに無罪を言い渡したのでもないということが暴露と密告に熱中するあまり忘れられている、と指摘している。彼はただ正確な観察が恩寵をもたらすことを願っているだけなのである。ドリーナの岸辺でハントケは尊敬すべき同僚のブロードスキーとシュナイダーの固定化した独善を忌々しく思うが、それはひどく感情的ではあるが作家にふさわしい憤慨であり、ありがたいことに勝利を確信したものでも、権力意識にとらわれたものでも、暴力的なものでもない。どこでこのような徹底したメディア批評が読めるか。どこでこのようにテレビ映像の力の生成を徹底的に文献学的に把握したものがあるか。というのがその骨子である。

「遠くで刀を振り回す輩は、自分の仕事を裁判官かデマゴグの仕事と間違えているのではないか」と書いたハントケに真っ先に反論したのがやり玉の一人となったペーター・シュナイダーである。「彼らは残虐行為と殺戮の背景の原因を追求する代わりに、あからさまに卑わいで、市場受けを狙った見せかけの事実を売ろうとしている」とハントケは同業者のヨーゼフ・ブロードスキー及びペーター・シュナイダーにも非難の矛先を向けた。「彼らの文体は、機械的に戦争と敵の姿を歪めている。彼らジャーナリスト、出版関係者は外国という高みから見ること、あの戦場の犬どもと同様の位置にみずからを眨めてい

る」と。

それに対してペーター・シュナイダーはシュピーゲル紙で⁶⁾ ハントケがよりによって包囲軍の解説者としてボスニアに向かっていると非難し、「イメージをもたらすものを偽作者と、また苦難に喘ぐものを、メディアに媚びを売る仮病者と中傷するものだ」と反論した。全く耐えられないのはハントケの報告が戦争の犠牲者について苦悩のポーズ、苦痛の表情を意図的に取っているとした点である。ハントケは個人的な体験、それも侵略戦争に関わりのないロマンティックに歪められたセルヴィアからの印象に終始している。新事実は何もないではないか、と。

「驚くこと、また全く理解し難いことに、そこには何一つとして何らかのメディアの記事にねらいを定めた反駁もなければ、‘もう一方の側’からのまだ出されていない戦争犯罪に関する調査済みのあるいは引用された証拠など、何一つの新事実もないのである。意見以外の何もない。現場の大多数のジャーナリストは、悪意からでもなく、または初めからでもなく、国連の全権委員であるタデウス・マゾヴィエツキーと同様、精細な調査と圧倒的な証拠に基づいて、ほとんどの残虐行為がセルヴィアの部隊によるものだと考えるに至ったのだ。」と。

この応酬については例えば1月19日のZeit紙で⁷⁾ ミヒャエル・トゥーマンとアンドレアス・キルプがそれぞれ意見を述べているのを読むことができる。ハントケが提出している中心的問題である、戦争開始当時ボスニアの3民族は同等の権利を持っていたのかという問いに対してシュナイダーは全くふれない。シュナイダーは責任(罪)の問題を単純な図式すなわちユーゴスラヴィアの戦争では、犯罪的な侵略者と、後に犯罪者への防備と反攻のために同様に犯罪を犯した犠牲者とにきれいにわけられる、という図式に還元してそこからでようとしな。セルヴィア人に対するドイツの立場は熟考に値する、1945年のバル

カンへのドイツ軍兵士の侵攻以来久しぶりにハントケがその機会を与えてくれた。(トゥーマン)

一方ではル・モンドやリベラシオンの外国特派員だけでなく国内のセルヴィア人を食べ物にしている(ハントケ) FAZ から偏向した砲弾(ハントケ)を撃っている連中に喧嘩を売るような男は、彼の孤独な私が我々の中の知ったかぶりをするものの中に浸透する前にすぐに黙らせなければならない。(キルブ)といった意見も見られた。

続けてスイスではユルク・レーダーアッハがハントケの本の出版⁸⁾に抗議してズールカンプを去った。南ドイツ新聞に載ったハントケのルポルタージュは、ズールカンプ社で出版されることになった。それに抗議してスイスの作家、ユルク・レーダーアッハは、少なくとも2年間は特定の出版社に所属しないことを新チューリッヒ新聞紙上で明らかにした。ハントケのルポルタージュは細心に練られた美的効果を持つ耐え難いスキャンダルであり、そのようなものと距離をとることが適切である。ハントケを支持することはどんな場合でも危険である。と彼は主張している。

このような反響を背景に2月以降ハントケは各地で自分のテキストの朗読会を開く。

2 / 15 ベルリンでの朗読会はハントケ自身反響の大きさに驚いて延期

2 / 18 ハンブルク ターリア劇場 意外なことに騒動なし。約1000人の聴衆は集中して考え深げに傾聴

2 / 25 フランクフルト

3 / 4 ミュンヘン大学 このときの様子をSpiegel(Nr.12, 3 / 18)が報道している。記事のスタンスは「ハントケは事実とモラルをねじ曲げている」と言う垂れ幕を講堂の二階席から垂らしている聴衆の写真に端的に示されている。この記事に続いてハントケのスロヴェニア語への翻

訳者であるトレックマンの寄稿も読める。

3 / 18 ウィーン、アカデミー劇場

3 / 20 クラーゲンフルト

3 / 21 リュブリャーナ 20, 21日の会は3月にスロヴェニア語訳を出したヴィー
ザー出版社 (klagenfurt) の主催である。

中でも一騒動あったのが6月3日のオーストリア議会での朗読である。社会民主党 (SPÖ) の国会議長ハインツ・フィッシャーがハントケをオーストリア国民議会に招いた。議会の建物の前庭ではウィーン在住のクロアチア人とイスラム教徒が、ハントケの親セルヴィア的態度に対して抗議をした。首相及びSPÖ党首のフランツ・ヴラニツキもハントケの朗読を聞いたが、オーストリア人民党 (ÖVP) の主だったメンバーは欠席した。詳細については筆者の理解を超えるが、人民党の内部ではこの招待に関し、様々な思惑を含んだ議論があり、党内抗争の一つの種になっているという。

これに関連して特に注目されたのは、サラエヴォ砲撃当時の駐ボスニア大使、フランツ・ボーゲンの抗議の手紙である。議長のフィッシャーに宛てた手紙で旧大使はハントケのウィーン議会への登場を「犠牲者の冒瀆」と呼んだ。「私はハントケに、私の目の前で射殺されたり四肢を切断された犠牲者を見るというべきだった」と書いている。大使はまた議長が、ハントケが朗読したのは‘ただの’文学的テキストだ、と言う主張をはねつけている。クロアチアとボスニアの政府筋はハントケのウィーン議会での朗読にショックを受けている。ザグレブとサラエヴォの政府筋によれば、これは明らかにウィーン政府のベルグラードへの取り入りであるということだ。⁹⁾

ハントケを揶揄した報道は多数あるが、以下にいくつかその他の聞くに価する意見を挙げておこう。

長年にわたってバルカンの戦争を報道してきたARDの特派員デトレフ・ク

ライネルトはDSに以下のような意見を寄せている。彼は自分がハントケのいう「学び、見て、そしてまた学ぶことを通じてのみ生じる現実知 (tatsächliche Wissen)を持っていると自称する資格のある者 (何度かセルビア人の銃弾の下をкаろうじて生き延びた) として語る。かれはハントケの事実誤認をいくつか指摘した後で次のように結ぶ。

もちろんそのようなことを見て学び把握するためにはセルヴィア人の間を旅行し、パリで映画を見る (ハントケはマルセーユで出発前にセルビア人の映画監督による映画を見てその映画が国連によるセルヴィアとモンテネグロに対する貿易協定に違反すると批判したル・モンドの記者を批判している) だけでは十分ではない。我々、外国人レポーター群 (要するに我々の同僚の大多数) は、安っぽい先入観で複雑な紛争をかたずけるような安易なことはしていない。我々は詩的にまた曖昧に書くことはできなかつたし許されもしなかつた。そのかわり我々の場合には事実が — ほぼいつでも — 合致しているのである。

(Detlef Kleinert : Billig und infam, Das Sonderblatt Nr.3. 19.Jan.)

ある作家の客観的でない挑発に続く議論は世論にとっては有益かもしれないが、この作家の名声にとっては災厄を意味するだろう。このような介入の場合問題となるのは我々が慣れきった思考、判断の図式から離脱することができるか、またその気があるかどうかということと、この作家の権威がそれに足りるかかどうかということだ。(Rudolf Balsler : Wochenpost, vom 11. Januar)

ハントケのテキストにはドイツの'教養遍歴'の香りがある。そこで著者は外面のリアリティを再現しようと努力することよりも自分自身の探求に向かっている。(Luc Rosenzweig : Le Monde, 19. Januar)

「セルヴィアを公平に」でハントケは文学的虚構という保護基盤を捨てた。

しかし状況が焦げ臭くなるとそこに安住する。(ein Bernhard-Fan)

ハントケの旅の印象は、崩壊しつつあるユーゴスラヴィアの大問題に関わる新事実を何も提供していない。だが小さな疑問は解明し、それでこの作家が自ら設定した目的は明らかに達成した。即ち「私はただ公正さへとせき立てられる、あるいはひょっとするとたんに考えさせることへ」(Christian Seiler, profil, Österreich, 15.Januar)

ハントケの見たセルヴィア：セルヴィアを公平に

少なくとも私はこの旅でセルヴィアをパラノイアの国としては見なかった。むしろ一人の孤児、一人見捨てられた孤独な子供の巨大な部屋と見たのだ。

これがハントケのセルヴィア紀行の主調である。多くの批判者に揶揄されるように引かれている例だが、ハントケはセルヴィアの人たちがいかに細心にガソリンを車のタンクに流し込み、その様子が憤み深く、モラルをわきまえた (gesittet) 印象を与えるかと語る。セルヴィアの様子は例えば次のような表現の積み重ねで描写される。

このベルグラードでの最初の晩はなま暖かく、半月が照らすのはトルコ人の要塞の上だけではなかった。南ヨーロッパの大きな中心都市のようにとても多くの人々が通りを歩いていた。ただわたしにはその人々が、例えばナポリやアテネよりも口数が少ないという印象だけでなく、逆にこの住民たちが独特の活気を持ち、そう、慎ましやかに礼儀正しい (gesittet) という感銘を受けた。みんなが罪の意識を持っているからではなく、自分自身とまた他の通行人にも意識を向け、自分を前に出すかわりにほのめかすある独特の礼

儀正しさという意味で注意深いことから、急いでも決してぶつかることのない歩き方から、また同様に落ち着いた、ひとに口をはさむ暇を与える話し方から…（そういう印象を得た）

基本的にハントケに対する反論は、すべて彼の事実無視ないしは誤認に対するものであった。では、ハントケが見たセルヴィアは事実ではないのだろうか。ハントケは学び、見て、再び学ぶことを主張した。彼の文章からそのことは納得できる形で伝わってくるだろうか。特に意図的に選択したわけではない上の例からもわかるように、ハントケはこのような、もし仮に彼の創作の一場面ならば問題なくリアリティのある表現として認められる文章の堆積で、セルヴィアを描こうとした。いわば微細な文の堆積で。前に挙げた批判にも指摘されていたが、この文体ですべてが統一されていればそれはそれで政治とは別の現実の一つの局面を示したことになった。

ところが、この紀行文のすべてにおいて彼が主張するところの、学び、見て、学んだ後に客観的判断をする態度が貫徹されたと、あるいは彼がそう努めようとしたとは言い難いところがあることも否定できない。それはまず事実の取り扱いの問題として現れている。例えば以下の文はセルヴィアに関するものではなくハントケが愛情を寄せるスロヴェニアについてのものだが、それだけいっそうその点については明確になるだろう。

二つのこと、1991年7月、つまりいわゆるスロヴェニアの十日戦争、ユーゴスラヴィアの争乱の発端となった戦争以来二つのことが頭から離れない。一つの数と一枚の写真である。約70人があの最初の戦闘で死亡したというその数。それ以後の戦闘での数十万人という死者に比べれば少ない。しかし、どうしてその死者のほぼ全員が当時すでに侵略者と見なされていて、その意味で圧倒的に優勢で、少数のスロヴェニアの独立軍との戦いなど軽いものだった

たはずのユーゴスラヴィアの国民軍の兵士なのか。(.....). 同じ南スラブの同胞という意識、少なくとも一方の側ではその信念あるいは幻想にしがみつきたくて、決して撃ち返すなという命令がでていたのではないか(.....)

そしてそれに付随したタイムの写真、何となくファンタスティックな感じのする戦闘服を着て、横断幕と旗で新たに創られた共和国を示しているスロヴェニア人のまばらなグループ。私の記憶ではそこにはほんとうに若いといえる者はいなかった、あるいはその群ないしは部隊には何も若々しさがなかった — 真っ先に浮かんでくるのは自由の闘士というより、腹の出た三十代半ばの海千山千の男たちが、行楽の終わりに、旗を野外劇場の装飾のように立てているイメージである。そして今日までその写真についての最初の思いが頭から離れようとしなない。優れた武器をどう扱っていいかもわからないほぼ70人の若い兵士をいきなり撃ち殺してしまったのは、自由の闘士などではなく、そんな半分浮かれた暇人たちではなかったのか。もちろんこんなことはたぶんナンセンスである。だがこうして送られたレポートや写真が受容者によってどのように改変され変形されるかを示している。

ハントケはタイムの写真から一つの仮説を導き出す。その仮説がただの印象からでたものではないかと読者が疑念を抱いたとき、もちろんそれはナンセンスで、受容者によってどんなに報道が変形されるかという例だという。しかしこの周到な、豊富な形容を含んだ、いわば作家の力量を示した書き方は、ハントケのこの報道についての読み、主張を読者に印象づけてしまう。ハントケの読みの当否は別として、これでは彼が批判するメディアと同じではないか。報道の危険性を喚起する意図とは裏腹に、ユーゴスラヴィア軍よりもスロヴェニア民兵の残酷さを指摘しているのに等しい。

もちろんハントケは自分がしようとしていることの複雑さを理解していないわけではない。

何、おまえはボスニア、カラジナ、スラヴォニア（ユーゴ北部）でのセルヴィアの非行を、第一級の現実を度外視して、メディア批評で非現実化するつもりなのか？ — あわてない。忍耐を。公正を。問題は — 私だけの問題？ — 入り組んでいる。いくつかのリアリティの段階、層があって込み入っている。それで私は、それを明らかにすることで、なにか完全に現実であることに狙いを定める。そこではすべての入り乱れたリアリティの様態が一つの関連のようなものを予感させた。なぜならほとんどテレビを見ているだけで何がわかるだろう。ネットワークとオンラインだけが情報源で、学び、見て、学ぶことからのみ生じる現実の知がなくて何がわかるのか。そのことの代わりにそのイメージだけを見、あるいはテレビニュースでのようにイメージの抜粋を、またネットワークの世界でのように抜粋の抜粋を見ているときに。

ではハントケは自分の観察の正当性を何を根拠にして主張するのか。いみじくも前述のバスラーの評言にあったように、自己の現実を見る作家としての力量に依存する以外にない。そしてその力量は、ある意味で、とはこれだけの反響を引き起こしたという意味で充分だったのかもしれない。

ハントケのスタイルの対極にあるものは、一般的なレベルでは次のような記事であろう。

数十万人のイスラム教徒とクロアチア人が、領土侵略と民族浄化という意図的なキャンペーンの中でセルヴィアの武力によって家を追われた。破壊と根絶を目的とするボスニアにおけるセルヴィアの戦争からの最終的な難民の数は、200万人に上っている。[1995年の10月までに350万人になっている]ボスニアの”連邦”軍はセルヴィア新ファシスト軍の側にたってサラエヴォを着実に破壊するための武器を供給している。ボスニア人とクロアチア

人がセルビアの攻撃に対して抵抗を組織できたところでは、組織的な大量殺戮と民族浄化は防げた。ボスニア人が武器をユーゴスラヴィア軍ないしはセルヴィア軍に渡したところでは、その地域の非セルヴィア人は全く無防備となり非道行為を被ることとなった。地域のボスニア人回教徒とクロアチア人によく守られた地域ではこの運命を免れた。ボスニア人回教徒とクロアチア人勢力はおおむね彼らが多数を占める地域だけを防衛した。彼らは組織的民族浄化とは関わりなく、彼らの行動は主として防衛に限られている。

全く標準的な記事だが、「領土侵略と民族浄化という意図的な」「破壊と根絶を目的とする」「セルヴィアの戦争」「セルヴィア新ファシスト軍」「非道行為」「彼らの行動は主として防衛に限られている」と言った表現は、セルヴィアが悪という前提で書かれている。しかしこの記者にとってはセルヴィアの非人道的行為が事実として前提されているからこの文も客観的である。そして公平に見て、メディアからの知識だけで何がわかるかとハントケは言うだろうが、また戦争状態にあっていったいどこまでが人道的で何をしたら非人道的かという疑問はあるにしろ、いまの社会通念上、セルヴィアが大量に非人道的行為をしたことはほぼまちがいない。かなり人口に膾炙したスペインの作家ファン・ゴイティソーロの『サラエヴォ・ノート』は、セルヴィアを指弾するという点で、これもハントケの議論の対極にあるが、そこに書かれたことを否定するには大変な体力を必要とするだろう。

ただハントケがその辺のことを当然意識していることは付け加えなければならない。以下のことばには含みがあるが、ハントケが文学の領域にとどまるつもりだったことを示している。

サラエヴォ、トゥズラ、スレブレニツァ、ビハーチ...に比べればセルヴィアの痛みは何ほどのこともないのか？ それで私は一文書くごとにこのよう

な文章は卑猥ではないか... (と考えた)

私の仕事は別のことだ。悪事を確定すること、それは良い。しかし平和にはもっと別のこと、事実以下ではないことも必要だ。では、詩的なものと同じ行しようとするのか。そう、もしそれが曖昧さのまさに逆のことと理解されるならば。あるいは、詩的なもの、と言う代わりに結びつけるもの、包括的なものと言っても良い。

おわりに：

かつて桑原武夫が好んで引用した、ストレーチィのことばがあったと思う。バターと卵そしてサラダとパセリがオムレツを作るのではないというのだが、あの場合、バター、卵、サラダ、パセリは確実な史的事実であり、オムレツは歴史だった。どんなに史的事実を積み重ねても、それが歴史になるとは限らない、ということだが、同じことがこの場合にも当てはまるだろう。材料だけでオムレツができないことも確かだが、変質した材料を使うことも許されない。

やはりこのルポルタージュは結局のところハントケの自己追求の旅の報告なのである。だからこのルポルタージュがもたらすはずの当然の反響をハントケは予測できなかった。少しでも政治的な意図があれば、いや、反響を望むことこそが政治的な意図だとすれば、あらかじめ予測可能な事態だったはずである。政治的には、一人一人のセルヴィア人がどうといった議論は成り立たないだろう。総体としてセルヴィアが非人道的行為を行ったことはおそらく動かし難い。ハントケの議論がどんな場合でも戦争で被害を被るのは常に一般庶民だと行った程度のものではないことはもちろんだが、彼のルポルタージュがメディアの単純なセルヴィア断罪と同様、近代の国家制度と(少数)民族問題の解決に資するものではないということは、それを要求することは筋違いだとしても明らかだ。ただ近年絶えず問われ続けているメディアの報道姿勢の危険性への警告

として一石を投じたものとしてみることに正しい。そしてそれを誘発したものは本来「非政治的人間」であるハントケのことばによる現実把握の問題であり、今回の‘事件’は、その検討の際に援用されるべきものと考えられる。

注：

- 1) <http://www-dw.gmd.de/sz>
直接ハントケのルポルタージュを読むには
<http://www-dw.gmd.de/sz/19960212/handke.htm>
Süddeutsche Zeitung の検索は…のところに日付を入れて
<http://www-dw.gmd.de/sz/1996.../archiv.htm>
その他メディアへのアクセスは以下の2つのURLからリンクがある。
<http://www.chemie.fu-berlin.de/outerspace/www-german.html>
<http://www-2.informatik.umu.se/hs/links/german.html>
- 2) Handke Peter: Die Wiederholung. Frankfurt/M 1986, S.196
- 3) a.a.O. S.198
- 4) ユーゴスラヴィアの戦争の包括的な情報については次のサイトからほぼすべて手に入れられる。<http://suc.suc.org/~kosta/tar/> (Wars for succesion of Yugoslavia 1991-1995)
- 5) http://www-dw.gmd.de/sz/19960127/kultur_9.htm
- 6) Der Spiegel 3/1996 S.163f.
- 7) <http://bda.web.aol.com/bda/int/zeit/archiv/index.html>
- 8) Peter Handke: Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa, und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien. Suhrkamp Verlag, Frankfurt/M.
- 9) Carl Gustaf Stroh: Wo eine Dichterlesung Politik ist. Die Welt, 5. Juni 1996